

『歴史総合，日本史探究』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

新課程の科目として初となる共通テスト科目『歴史総合，日本史探究』が実施された。歴史科目としては「歴史総合」『歴史総合，日本史探究』『歴史総合，世界史探究』の2科目・1出題範囲があり，今年度は『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」第1問が『歴史総合，日本史探究』の，第2問が『歴史総合，世界史探究』の，それぞれ第1問となった。

新科目である歴史総合は，近現代の歴史の変化に関わる諸事象について，世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉え，資料を活用しながら歴史の学び方を習得し，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察，構想する科目として設置され，日本史探究は，歴史総合を踏まえ，従前の日本史A，日本史Bのねらいを発展的に継承しつつ，我が国の歴史の展開について総合的な理解を深め，各時代の展開に関わる概念等を活用して多面的・多角的に考察し，歴史にみられる課題を把握し，地域や日本，世界の歴史の関わりを踏まえ，現代の日本の諸課題とその展望を探究する力を養うことをねらいとする科目として設置された。

令和7年度の『歴史総合，日本史探究』の受験者数は114,599人，平均点は56.99点であった。なお，評価に当たっては，21ページに記載の8つの観点により，総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

第1問 『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」の第1問と同じ。

第2問 授業で生徒が「菓子の歴史」について探究する学習場面を基に，時代と分野を横断する幅広い出題がなされた。

問1 会話文と工藤平助が作成した意見書を読み，資料に関連する四文から二つの正文の組合せを選択する問題。田沼政治に関する知識と，資料を読解する技能が求められた。

問2 大正時代の菓子の輸出に関する資料と新聞記事を読み，読み取った内容をまとめた二文について，その正誤の組合せを選択する問題。記事から必要な情報を読み取り，大戦景気中の日本のアジア市場独占と関連付ける思考力・判断力・表現力等が求められる良問だった。

問3 平安時代の貴族に関する四文から適当でないものを選択する問題。平安時代の貴族文化や中世の禅宗文化に関する基本的な知識が求められた。

問4 中世の禅宗寺院で砂糖菓子が普及した背景について述べた四文から最も適当なものを選択する問題。鎌倉・室町幕府が禅宗を保護したことについての確かな理解と，菓子が普及した背景として適当かどうかを判断する思考力・判断力・表現力等が求められた。

問5 古代から近代にかけての砂糖の普及に関して述べた文から最も適当なものを選択する問題。A・Bの会話文や前出の資料から情報を読み取る技能と，南蛮文化や第二次世界大戦中の統制経済に関する基本的な理解が求められた。

第3問 大宰府跡などの遺跡や博物館を見学した生徒のまとめを題材に，原始・古代の政治・外交・文化について出題がなされた。正倉院宝物や来迎図など，文化財の図版資料が用いられた。

問1 3世紀までに九州北部に中国大陆や朝鮮半島からもたらされた可能性がないものを選択する問題。中国史書にある弥生時代の朝貢の記録や中期古墳の出土品などに関する基本的な知識が求められた。

- 問2 唐や朝鮮半島との関わりについて述べた文から最も適当なものを選択する問題。主に奈良時代の朝廷の外交や政治に関する正しい知識と理解が求められた。
- 問3 「高麗」と表記がある四つの資料から、渤海のことを「高麗」と記す資料を選択する問題。主に資料文中の王朝名から年代を推測し、渤海と日本の通交に関する知識と関連させて判断する思考力・判断力・表現力等が求められた。
- 問4 九州北部の重要性について述べた二文の正誤の組合せを選択する問題。刀伊の入寇に関する知識や、平安時代初期の健児の制と軍団の廃止を関連付けて理解しておくことが求められた。
- 問5 遣唐使の派遣が停止した後の外交と文化の展開に関するメモ・図を見て、メモと図が同時期かどうかを判断する問題。天平文化と国風文化に関する基本的な知識が求められた。
- 第4問 中世の武士について探究した高校生の会話文と資料を題材に、鎌倉時代から戦国時代の政治・社会経済について主に出题された。良質な資料が多く、示唆に富むものであった。
- 問1 鎌倉の御家人に関する四文から適当でないものを判断する問題。鎌倉時代の政治史や文化史に加え、室町時代の守護大名に関する知識・理解も求められた。
- 問2 蒙古襲来絵詞にある図から、蒙古襲来の推移に関する理解を確認する問題。蒙古襲来全体の理解を前提に、鎌倉幕府滅亡前にも異国警固番役が持続していたことを資料から読み取る良問であり、提示資料の時期や地域なども含め興味深い。
- 問3 今回の試験において唯一の語句指定問題。神道史への理解とともに、戦国期の文化史と結び付け、「魔法」をキリスト教と措定する思考が求められた。中国・九州地方には黄檗宗寺院も多い。対になる黄檗宗の選択肢が別の宗派であれば正答率は変化したかもしれない。
- 問4 会話文から近世の統一権力が貨幣製造を行う理由として、中世に関する政治経済的な理解を基に、蓋然性のあるものを選択する問題。中近世移行期の理解を問う良問だが、正答率は33.38%と低かった。受験者が題意に気付くことができるリード文の工夫を求めたい。
- 問5 中世の武士に関する四文から最も適当なものを選択する問題。日宋貿易・勘合貿易への理解、律令法と鎌倉幕府の法制の関係、武士の家の血縁・地縁関係など、中世の武士に関する総合的な理解が求められた。正誤を判断する要点が簡潔にまとめられていた。
- 第5問 近世の村について授業で考察している高校生が作成したメモを基に、江戸時代に関する出題がなされた。近世の社会・経済に関する問いが主に出题された。
- 問1 太閤検地、近世の村に関しての正文の組合せを選択する問題。近世の支配体制の基本である石高制の理解が求められた。誤文の判断が容易であり、取り組みやすい問題であったと思われる。
- 問2 17世紀の村掟を現代語訳した資料を読み取り、選択肢の文との整合性を判断する問題。90%を超える正答率であり、識別力が低い小問であった。百姓の相互扶助や自治、百姓観念（自意識）に関する考察を伴う出題など、工夫があっても良かった。
- 問3 江戸時代の農村政策に関する文章を時代順に並べ替える問題。本百姓体制維持のために幕府が行った施策の内容と年代に関する正しい理解が求められた。
- 問4 上野国鎌原村に関するメモを手掛かりに、選択肢の文との整合性を判断する問題。天明期の浅間山噴火についての理解と、資料文の具体的な情報から農村の状況を考察する思考力・判断力・表現力等が求められた。
- 問5 幕府領における石高と年貢高を示す折れ線グラフ、鎌原村に関する二つのメモを手掛かりに、四文から適当でないものを選択する問題。グラフやメモからの読み取りと、近世の村に関する理解を関連付けて考察する思考力・判断力・表現力等が求められた。

第6問 松本清張の年譜やその著作を基に、近現代に関する出題がなされた。政治、社会・経済、文化など幅広い分野から出題され、年表（年譜）や4コマ漫画を用いた設問もみられた。

問1 松本清張の著作「西郷札」に関するメモと新聞記事を基に、資料から読み取れる内容と同時期の対応する政策との正しい組合せを選択する問題。日本の台湾・朝鮮への植民地支配の時期や、1870年代後半の政治・経済の流れに関する正確な理解が求められた。

問2 年譜と資料からの読み取りについて述べた四文から適当でないものを選択する問題。丁寧な資料の確認と、戦時中に関する知識が問われた。

問3 年譜を参考に、当該期のマスメディアに関する三文を年代順に並べ替える問題。大衆文化としての新聞、戦中の統制、戦後文化などへの理解が求められた。

問4 占領期に関する四文から適当でないものを選択する問題。占領期から吉田内閣に至る時期の政治史に関する理解が求められた。疑獄事件などの知識や、破壊活動防止法の背景にある占領政策の転換に対する正確な理解が求められた。

問5 長谷川町子の「意地悪ばあさん」の4コマ漫画の記述内容を資料として、そこから考えられる疑問に対する、整合性のある調査方法を選択する問題。資料、注釈からの判断とともに、2000年代の小泉内閣までの理解が求められた。提示された資料を含め、興味深い出題であった。

3 分量・程度

新課程への変更に伴い、『歴史総合、日本史探究』に試験科目が変更となった。平均点は昨年度の旧課程『日本史B』と比較しても大きな変動はなかった。60分の試験時間に対して、大問が6問、小問が33問であり、試作問題と比較すると、第1問で小問が一つ減少した以外は大きな変更はなかった。第1問では、近代化・大衆化・グローバル化の大きな三つのテーマからバランスよく出題され、複数の地域にまたがる出題が多かった。7や8などでは、人名や歴史事象の内容などに関する具体的な知識が必要とされたため、大まかな理解でとどまっていた受験者にとってはやや難しく感じたと思われる。3のように、イギリスの自由貿易体制に関する概念理解があれば穀物法の知識がなくとも解答を導けるような出題上の工夫は、歴史総合という科目のねらいに沿うものだと考える。

出題範囲に関しては、全時代をまんべんなく問われたが、現代史の出題が多く、近代史からの出題がやや少なかった。現代史では、1990年代から2000年代初頭にかけて謳われた「規制緩和・構造改革」が出題され、21世紀の歴史まで学習する必要性がメッセージとして発信された。出題分野に関しては、政治史、社会史、外交史、経済史、文化史等分野のバランスが図られており、小問の選択肢内で複数の分野から問われた出題も多かった。資料は簡潔で分量も適切であった。

4 表現・形式

問題文の表現については、資料に極端に難解なものはなく、資料が現代語訳や書き下し文に変更されるなどの配慮がなされ、注釈もバランスよく付されていた。人名や事件名、制度の名称など、歴史用語はなるべく使用せずに、理解度を測る表現上の工夫がなされていた。

形式については、高校生の具体的な学習場面から展開される大問が中心であり、旧課程『日本史B』と同様であった。また、23・28のように、大問を通観する問題もこれまでの共通テストと同様に出題され、与えられたリード文や資料文は全て活用された。小問でみると、空欄に適語や文を補充する問題や年代整序問題が減少した。試作問題にあったように、生徒の問いと学習活動、疑問と調べ方の対応関係を問う新しい出題形式もみられたが、正誤を判断する問題が多く、出題形

式による受験者の混乱は少なかったと思われる。

5 ま と め（総括的な評価）

全体として、学習指導要領の趣旨を踏まえ、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」の観点を十分に発揮させて解答する良問が多く、授業や探究活動を通じて身に付けた資質・能力の到達度が明確に測られる識別力の高い良問が多かった。特に、会話文や文字史料、地図や図版、新聞記事や4コマ漫画など、多種多様な初見資料の読解が多く、高い思考力・判断力・表現力等が求められた。一方で、**22**のように、リード文と問題文だけでは問題の意図が伝わりにくい出題があった。中近世の移行期を問う抽象度の高い問題であるため、受験者がねらいに気付くことができる出題上の工夫をお願いしたい。

初年度となった第1問の「歴史総合」分野については、地域や時代を横断した大きな歴史の展開や概念の構造的理解が中心として求められた。教科書の記述にばらつきがある中、歴史総合の授業のあり方を考える一つの指針が示されたと考える。グローバル化が進展して複雑化する現代の諸課題を高校生が自分事として捉え、解決に向けて学びを深めるためにも、高等学校での学びでやや軽視されていた現代史分野や日本以外の国際関係をしっかりと学ぶことが改めて重要になってきている。日本史探究の近代史分野との量的なバランスや、知識重視の出題などの観点の偏りに留意しながら、多面的・多角的な歴史の見方を働かせた出題や、地域や時代を横断した出題が増えてほしい。

「日本史探究」分野については、昨年度の共通テスト『日本史B』から大きな出題傾向の変化はなかった。比較的正答率が低かった問題は、人名や制度、法令などの歴史用語を用いずに説明した文について内容や年代の正誤を判断するものが多かった。資料から必要な情報を読み取ることができても、関連付ける知識が用語の暗記だけでは解答に至ることができなかったと考えられる。背景や因果関係を意識して学習内容を説明できるまで理解を深めるとともに、単元の最後に時代や時期の特徴を考察するまとめ学習が重要であった。また、提示された資料は全国様々な地域のものが活用されており、授業での活用という視点でも魅力的なものが多かった。第3問の資料1は、古代の東アジア秩序における呼称が題材となっており、日本の律令国家と東アジア諸国の関係性を考える上で学びの広がりがある資料であった。第4問の資料3に関しても、吉田家が各地に神道を伝えていたことや、「魔法」という表現が興味深く、戦国大名と公家の関わりや、公家のキリスト教への認識を考える良いきっかけとなる資料であった。一方で、魅力的な資料だからこそ、問い方の工夫が試されるとも感じる。今後も多様な地域資料が用いられ、探究学習の中で身に付いた資質や能力が十分に発揮される問題を期待したい。

最後に、共通テスト問題作成に関係した方々の多大な御尽力に、心から敬意を表したい。